

# みどりのゆび

諏訪中央病院グリーンボランティア通信 No.130号 2023年9月13日発行



## リンデンバームの木の下で

その夜、病院の庭は優しい光に満ちました。大きなリンデンバームの木の下には灯がともってステージになり、草の上にもランタンやロウソクが置かれました。全5回で企画された、病院職員に向けてのイベント最終回、タイトルは「これまでとこれからの地域医療を語ろう」です。それまでの4回のスピーカーの医師たちが一堂に会して、この庭で座談会が開かれました。昼に降った雨はシャワーとなって緑を甦らせ香気を生み、職員手作りの会場は輝きを増します。

私もゲストスピーカーとして参加することになりました。思えば、病院のサポートを受けながら私がグリーンボランティアを募ったのは、25年も前のことです。市内にあった建物から移転したばかりの、建築工事で踏み固められ荒れた土に、最初の仲間たちとスコップを入れました。以来、たくさんの人の手と想いが育てたこの場所が、この夜のステージです。グリーンボランティアのメンバーは庭で育った緑たちを使って、当日会場にお越しの皆さんに手渡すための小さな香りの花束をかごに溢れるほど作りました。

座談会が始まると、スピーカーの医師ばかりでなく会場やオンラインで参加した方々も、この庭での忘れられない思い出や抱いてきた想いを次々に語って下さいました。命が巡り、生と死が混じりあう庭、人生の旅人のための木陰は、「病院の庭」の役割を叶えてくれています。

光をまとい輝くリンデンバームの学名には、「ハートのかたち」という意味があります。無数のハート型の葉はさわさわと風に揺れて、幸せな夜の庭を見守っていました。  
[萩尾]

\* 地域医療に関するオンラインレクチャー最終回のトークイベント(8月24日18:30～)に参加された萩尾エリ子先生から寄稿いただきました。

## ★庭の植物あれこれ 《植物の分類と呼び名》

ヒガンバナ(彼岸花)は、古い時代に大陸から渡来した帰化植物で、秋の彼岸頃に花が咲くのでその名が付いた。別名マンジュシャゲ(曼珠沙華)。万国共通に使える生物の呼び名“学名”を考案したのは、18世紀のスウェーデンの



博物学者リンネで、ラテン語表記の(属名+種小名)から成り二名法と言われる。

ヒガンバナは *Lycoris radiata* (イタリック体で書くのが正式)で、属名のリコリス (ヒガンバナ属) はギリシャ神話の女神の名からとり、種小名のラジータは“放射状”の意味で花が放射状に広がることに因む。属は分類学上の最下位のグループで、園芸では属名をそのまま使うことも多く、同じ頃に咲くイヌサフランは、属名のコルチカムで呼ぶ人が多い。



以前の分類学は、目に見える形態に基づいていたが、今は葉緑素の DNA 解析を基にした APG 分類法に置き換わりつつあり、ヒガンバナの分類は、被子植物>単子葉類>キジカクシ目>ヒガンバナ科>ヒガンバナ属となっている。[入江]

## コラム No.23

## 草木染を手掛けて

草木染を手掛けて30数年近くになります。働き盛りには年間何十キロという毛糸を染め、仕事にもしていました。

先日はまだ染めたことのない庭のカンゾウをバッサバッサと刈り取り、大鍋で煮出して染めました。明礬と酢酸銅、それぞれの色を得るのに二種類の媒染剤を使いました。媒染剤とは色を引き出し、染める物に色を定着させる役目のものです。今回は白い毛糸に染めました。明礬媒染からはクリーム色、酢酸銅媒染からは鮮やかな黄緑色が染まりました。どちらも草木染らしい素朴な色を頂きました。

身近な草木から思いがけない色が得られるのが草木染の醍醐味です。桜、梅、落、葛、栗、胡桃……数え上げたら切りがありません。

春はタンポポの花から黄色が染まります。嫌われ者のヒメジオンからはペパーミントグリーンの素敵な色が染まります。意外なのは赤い薔薇の花びらからはグレーが染まりました。同じ草木の同じ色でも季節によって、春は淡い色味、秋は渋みのある色に染まります。ちなみに、草木染は天然素材のみに染まります。

皆さんも御自分の庭の身近な草木で染めることにチャレンジされるのも一興ではないでしょうか……

[田村]



カンゾウの明礬媒染



カンゾウの酢酸銅媒染

### \*\*\* \*\*お知らせ \*\*\* \*\*

- 10月21日(土) 10:00~15:00 病院祭
- 10月25日(水) 9:30~11:30 作業中にハロウィンランタン作り
- 10月27日(金) 16:30~ ハロウィン祭り